令和８年度全国学力・学習状況調査の結果の分析

池子小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等　●課題や改善点等）
全国・県と比較して　∓５％の差が見られる内容について中心に分析し、自校の指導計画や授業づくりに活用してください。

【　国語　】

≪言葉の特徴や使い方に関する事項≫

●言葉の特徴や使い方に関する事項については、本校の平均正答率は 54.7％で県及び全国の平均正答率と比較して、10 ポイント以上下回っている。

≪情報の扱い方に関する事項≫

○情報の扱い方に関する事項については、本校の平均正答率は 55.4％で県及び全国の平均正答率より約２ポイント上回っている。

≪話すこと・聞くこと≫

○「話すこと・聞くこと」については、本校の平均正答率は 67.6％で、県より 0.7 ポイント、全国より 1.8 ポイント上回っている。問題別にみても、「構成メモの工夫を考える」問題について 78.4％、「動画の工夫を考える」問題について 64.9％と比較的高い正答率を示している。友だちや相手を意識して話したり、話の構成を考えたりする学習については、一定の力が身についていると捉えられる。

≪書くこと≫

●「書くこと」については、本校の平均正答率は 35.1％で、県 46.3％、全国 45.7％とどちらも 10 ポイント以上下回っている。情報をもとに、根拠を明確にして自分の考えを書く力に課題があると考える。

≪読むこと≫

●読むことについては、本校の平均正答率は 63.5％で、県 66.2％、全国 65.9％で、県、全国には少し届かないが、極端に低い状況ではない。一定の力が身についている一方で、文章中の情報を根拠として考えを形成することに課題があると考える。

≪児童質問紙　国語に関する質問≫

本校では、国語の授業内容が「よく分かる・だいたい分かる」と回答した児童が 79.5％で、県・全国をやや下回っている。一方、「国語の学習は将来、社会に出たときに役立つ」と考える児童は 94.9％と、県・全国を上回っており、国語を学ぶ意義は十分に感じている。また、教師から自分のよさや以前よりできるようになったことを伝えてもらったという回答は 87.2％で、県・全国を大きく上回っている。一方、文章を根拠に自分の考えをまとめたり、考えを文章で表現したりすることにはやや課題が見られる。今後は、「分かった」から「自分の考えを表現できた」へとつなげる授業づくりが重要だと考える。

【　算数　】

≪数と計算≫

●数と計算については、本校の平均正答率は56.1%、県は62.6%、全国が61.1%と約５ポイント下回っている。単に計算するのではなく、数の大きさや数量との関係をとらえて判断・説明する問題になると正答率が低下する傾向がみられる。

≪図形≫

○図形については、立方体の体積を求める問題で、本校の平均正答率は75.7%で、県69.2%、全国72.7%を上回っていて、基本的な図形に関する理解が比較的できている。

≪測定≫

●測定については、本校の平均正答率は67.6%、県は79.7%、全国78.1%と県及び全国の正答率から10ポイント下回っている。数量や単位をとらえ、具体的な場面の中で考えることができる児童はいるが、測定した数量を単独でとらえるだけでなく、複数の数量を関連付けて考えることに課題があると考える。

≪変化と関係≫

●変化と関係では、問２（3）単位量当たりの大きさを求める除法の式の意味を理解し、その商から二つの広場のどちらのほうが混んでいるかについて判断できるか。そして、問２（4）基準量、比較量、割合の関係が正しくあらわされている図を選ぶことができるかを問う問題で、県及び全国の平均正答率を下回っている。「どの数量を基準にしているのか」「二つの数量がどのような関係になっているのか」を図や言葉を使って表現することが重要と考える。

≪データの活用≫

○データの活用については、問４（2）示された情報を基に、数量の関係に着目して、条件に合う時間を求めることができるかどうかを見る問題で、県及び全国の正答率と比較し10ポイント以上下回っている。表やグラフから単純に数値を読み取るだけでなく、複数の情報を関連付け、条件に合う情報を選択して判断することに課題が見られる。

≪児童質問紙　算数に関する質問≫

本校では、算数の授業内容が「よく分かる・だいたい分かる」と回答した児童が79.5%で、県・全国を上回っている。また、「算数の学習は将来、社会に出たときに役立つ」と考える児童は97.4%、「学習したことを普段の生活で活用できている」と回答した児童も89.7%と高く、算数を学ぶ意義や生活とのつながりを実感していることが分かる。一方、「算数が得意」とする児童は58.9%、「好き」とする児童は56.4%で、県・全国と同程度かやや下回っている。さらに、解き方が分からないときに「あきらめず、いろいろな方法を考える」児童は76.9%で、県・全国を下回っている。今後は、「分かる・役立つ」を「自分で考え、試行錯誤して解決できた」という実感につなげることが課題だと考える。

◎児童質問紙の結果　特徴的なことや課題と考えられること等

本校の児童は、家庭での保護者との対話を多く行っていたり、自己肯定感や幸福感、算数や英語への前向きに取り組んだりする姿勢がみられる。一方で、「学校に行くのが楽しい」と感じる割合や、困りごとを教師へ相談できる割合が全国平均を下回り、学校生活への満足感に課題がみられる。また、学習の振り返りや家庭でのICTの学習活用、読書習慣にも改善の余地がある。今後は、安心して相談できる学級づくりと主体的な学習習慣の育成を重点課題とすることが望まれる。

具体的にみていくと、保護者と勉強について話すことを「ほぼ毎日」と「週１～２回」行っている児童を合わせた割合は84.6%で全国の75.0%、県の73.1%を上回っている。また、学校での悩みを親や家族と話す割合も「ほぼ毎日」と「週１～２回」行っている児童を合わせた割合は46.1%で、全国の35.5%、県の32.3%を上回っている。

自己肯定感が高く、自分には良いところがあるという設問に対し、肯定的な回答を行った児童は77.0%、全国は85.6%、県は85.8%と平均並みではあるが、「当てはまる」と回答した児童の割合は46.2%で、全国の43.6%、県の44.2%と高くなっている。学校の授業以外で英語を使う機会があるかを尋ねる設問で、肯定的な回答をした児童が64.1%で、全国の46.2%、県の49.6%と比較してとても高い割合となっている。

課題として、「学校に行くのは楽しい」の設問に肯定的に回答した児童が、64.1%、全国が85.7%、県が86.2%と大きく下回っている。「困ったときに先生に相談できる」の設問に対し肯定的な回答をした児童が61.5%、全国が70.6%、県が66.9%と下回っていて、否定的な回答をした児童は38.4%で、全国29.0%、県32.1%を上回っている。

SNSや動画視聴を４時間以上行っている児童は35.9%で、全国21.9%、県20.4%を上回っている。

読書習慣について、全く読書をしないと回答した児童は33.3%で、全国26.3%、県28.0%を上回っている。

◎調査の結果を受けて、今後の指導改善に向けて学校として取り組むこと

今回の全国学力・学習状況調査の結果を、国・県との比較だけでなく、児童質問紙の結果と関連付けてとらえると、本校の児童には、これまでの学習や学校生活の中で培ってきたよさがある一方、「分かったことや考えたことに根拠をもって説明すること」「複数の情報を関連付けて考えること」「自分の考えを表現し、考えを深めること」に、今後さらに伸ばしていきたい部分が見られる。

また、学習の大切さを感じたり、教師からの具体的なフィードバックを受けたりしている児童がいる一方で、「自分はできる」という実感や、分からない問題にも粘り強く取り組む姿勢については、さらに育てていく必要がある。したがって、今後の指導改善においては、個別の問題の正答率を上げることだけを目的とするのではなく**「考える」「表現する」「学びを振り返る」という学習過程そのものを充実させること**が必要になると考える。

そのために、各教科の授業において、①問いをもつ→②自分で考える→③根拠をもって表現する→④友だちの考えと比較する→⑤考えを深めたり、修正したりする→⑥学んだことを振り返る　といった学習活動を各教科・各単元の特性に応じて、意図的に設定する。教員は正解を求めるだけでなく、「なぜそう考えたのか」を児童が考え、説明するための設問を投げかけ、児童の思考を引き出すよう意識する。

また、児童質問紙から見えてきた課題を考えると、学力面の指導だけでなく、児童が自分自身の成長を実感できるようにすることも大切だと考える。そのため、教師からのフィードバックが大切で、ただ「いいね」「よくできたね」で終わらせることなく、「答えだけでなく、理由も書けるようになったね」や「友だちの意見を聞いて、自分の考えを修正できたね」など、「何ができるようになったのか」を具体的に伝えることを意識していきたい。